様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３５８０

研究課題名（和文）アクリル絵具による古典的西洋画技法表現の研究および美術教材への展開

研究課題名（英文）Research of classical painting technique expression by acrylic paint and development to art teaching materials

研究代表者
大泉　佳広（OIZUMI, Yoshihiro）

宮崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０５１８６４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　私がこれまで研究してきたアクリル絵具による技法をマニュアル化し、学校教育現場で使用可能な美術教材として展開する方法を研究した。
　画材メーカーや作家への取材をおこない、中学・高等学校の美術教員の助言を求めながら、中学・高等学校で技法講座をおこない、中学生と高校生の技法習得の様子を調査した。
　また、私の作品制作・発表をおこなうことによって、新たなアクリル絵具の可能性と、「デジタル」による表現では味わえない、絵具という素材を活用した表現を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現在、多くの中学・高等学校では美術の授業においてアクリル絵具が使われている。しかし、多くの美術教員はアクリル絵具の特性をあまり理解しておらず、以前に多く使用されてきたポスターカーラーと同様の扱い方をしている状況が見受けられる。また、以前ほど美術教員が自分自身の作品制作に勤しむ時間は、現在の学校教育現場にはなく、そのため専門的な絵画技法を習得する機会をなかなか見つけられない。さらには、多くのアクリル絵具の技法書は、授業教材として活用することを目的として作られていない。
　この様な現状から、絵具での表現の魅力を実感できる美術教材開発のための調査・研究をおこなった。

研究成果の概要（英文）：I made a manual of the technique by the acrylic paint which I have studied so far, and researched the method to develop it as an art teaching material that can be used in the school education field.
We conducted interviews with art material makers and artists, and asked for advice from art teachers at junior high and high schools, and conducted technical courses at junior high and high schools, and surveyed how junior high school students and high school students acquired techniques.
Also, by producing and presenting my work, I presented the possibility of new acrylic paints and an expression utilizing materials called paints that can not be tasted with "digital" expression.

研究分野：絵画表現

キーワード：絵画表現　美術教育　アクリル絵具

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）ほとんどの美術の教科書で古典的西洋絵画が紹介されているが、その透明感や光沢は使用されている絵具や技法の特性によるものであることを記述されてはいない。また、それを適切に解説できる美術教員が少ない。そのため、ポスターカラーなどの不透明絵具だけで古典的西洋絵画の模写をさせるなど、描画素材の特性を無視した指導がなされている現状を多数見てきた。

（２）20 年程前から多くの中学校・高等学校では、美術の授業で使用する絵具を、ポスターカラーからアクリルガッシュに変更してきた。しかし、多くのアクリル絵具の技法書では「この様なことも出来る」という紹介に終わっていることから、多くの学校教育現場の美術教員は「なんでも出来るらしいが何をさせてよいのかわからない」「とりあえずポスターカラーの代用品として使用している」という話をしばしば耳にする。

（３）研究代表者は 20 年程前から「フレスコ画技法を使わないフレスコ画風な画面肌をもった絵画」を自身の作品で研究・制作・発表をしてきており（『美術の窓』№303、「新ミクストメディア　マル秘技法講座 13」、『美術の窓』№356～358、「変形パネルとミクストメディアによるマチエール」）、それを可能にしたのはアクリル絵具の汎用性である。また現在は「フランドル派風の画面肌を持ったアクリル画」も研究しており、アクリル絵具はメディウムの調整によっていかなる伝統的な絵画技法の画面肌の効果も再現が可能であると実感している。

（４）アクリル絵具は比較的新しい絵具ということとその開発経緯と汎用性から、「テンペラ画技法」「フレスコ画技法」「油彩画技法」「日本画技法」のように、素材の特性によって導き出される基本的な技法というものが存在しておらず、また他の様々な技法との統合的研究はなされていない。そのため、画材メーカーのカタログや技法書などでは「重ね塗り」や「盛り上げ」などアクリル絵具の使い方を「この様なことも出来る」といった紹介にとどまっている。

（５）この様な背景の中、申請者は素材の特性と表現効果の関係性について重点をおいた研究の必要性を感じ、また、中学生・高校生にたいして、情報不足による無知や、無意味な執着や偏見を持った指導がおこなわれないように、学校教育現場の美術教員が扱いやすい「教材」と「技法書」を開発する考えに至った。

２．研究の目的

（１）古典的西洋画技法（テンペラ絵具と油絵具の混合技法）のような透明感のある空間を表現することを可能にする、アクリル絵具による表現技法についての研究、およびこの技法を用いた中学校・高等学校の美術の授業のための教材の開発が目的である。

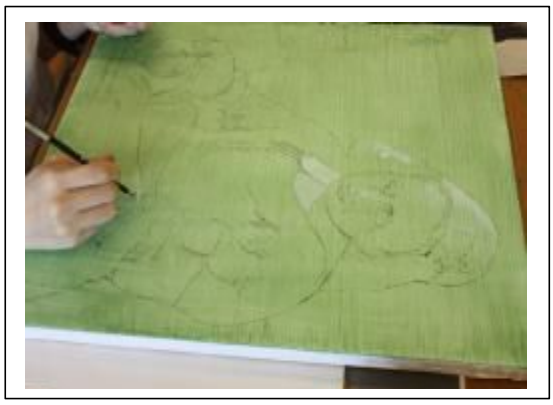
（２）この技法は美術の授業では扱いにくい油絵具とテンペラ絵具を使用せずに、古典的西洋画技法の画面肌と絵具の透明性からくる空間感を表現することができる。

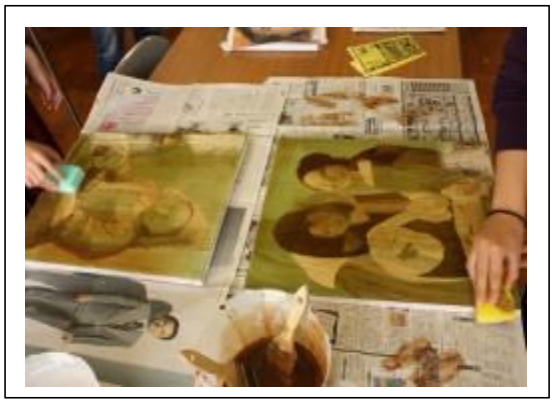
（３）色調と明暗による画像表現に囲まれている中学生・高校生が、素材の特性を活かした画面肌の効果を体験する事により、「絵画は画像だけの表現ではない」という絵画本来の魅力と接する機会となる。この事によって、本物の古典的西洋画技法に興味を持つ切っ掛けとなったり、デジタルでは表現しきれない領域が存在することを知る切っ掛けとなることを狙いとしている。

３．研究の方法

（１）平成２８年度は、まず学校教育現場の美術教員への取材をおこなうに合わせて、多くの画家と画材メーカーに対する取材もおこなった。取材を進める段階で、私が研究し自身の作品制作に取り入れている技法は私が考えているよりも特殊であり、また、実践するためにはある程度のデッサン力や技術力が必要であり、一般的な中学生・高校生にとって困難であることがわかってきた。そのため、美術コースのある鹿児島県立松陽高等学校で技法講座をおこない、デッサンを学んでいる高校生の反応を調査した。

（２）平成２９年度は、前年度の研究から表れてきた「アーテスト」と「教育者」との感覚のズレをもう少し明確にするために、宮崎大学教育学部の学生に対して技法講座をおこない、授業担当者（教育者）側からの視点で、この技法を学校教育現場に導入するための問題点を探った。受講者の技術力の差をいかにして埋めるかを調査・実験した。また、私の作品制作を直に見せることで、私が無意識におこなっている部分の洗い出しを行った。





（３）平成３０年度は、デッサン力や技術力の面で幼い生徒たちに絵具の特性から現れてくる質感を感じ取ってもらえるかに重点をおいて、技法講座の構成を研究した。絵を描きなれていない者にとって「ホワイトで明部を描き起こす」という感覚の習得が困難である事が見て取れたので、絵具を使用する前に「カラーキャンソン紙に白チョークで球を描く」というトレーニングを取り入れた。また、このトレーニングは、絵具を重ねて描画していくことにも不慣れな生徒に対しても「チョークを重ねれば明るさが増し、球がより立体的になっていく」という事を体験させることによって、「色を塗り分ける」から「絵具で描きこむ」という感覚を芽生えさせることが可能になった。この様に構成を改善した技法講座を、延岡学園高等学校・尚学館中学校において中学１年生から高校３年生までの生徒たちに対して行った。

４．研究成果

（１）本研究において、私の研究してきたアクリル絵具による技法がデジタルで表現しきれない絵具の質感を活用する教材となりうる可能性があることは確認できたが、受講者の個々の技術力の差が作品の習熟度に大きく表れるため、現場教員から学校教材にあまり適しているとは言えないという指摘を受けた。もともと「絵が得意な生徒」は新たな「武器」を手に入れたように、作品のレベルが上がるが、もともと「絵が苦手な生徒」はその「武器」の効果を実感できずに終わるようであった。学校教育現場の視点からすると「作品の完成度の差がより開く教材」であったのだ。教育者の視点を加味して教材開発をおこなうと「全体的なレベルアップ」が理想であり、その中で個々の表現の差や違いが表れるべきである。

（２）この問題点が初年度に指摘されたため、2 年目と 3 年目はこの問題点を改善するための研究となった。当初の「技法のマニュアル化」に向かう研究から、「適切な学校教育教材の開発」の研究という一面を加味しなくてはならなくなったが、アーティストの視点と教育者の視点との最大公約数的な領域を探す意義は有意義であったと感じられる。学校教育の中の美術の授業は作家養成ではなく、もっと幅の広い抱擁性が必要であり、この事を意識して生徒たちに何を体験させるかを考慮した教材が「有意義な学校教育教材」であると思われる。

（３）本研究は現状に対応しながら進行した結果、ある一面ではある程度の成果を得たと感じ取れるが、現在の学校教育現場での美術教育の現状も感じ取れた。現在の中学生・高校生たちは私たち世代よりも明らかに「落書き」の経験が少ないと感じ取れる。配布されるプリントが両面印刷のためなのか、今の生徒たちが単に相対的に真面目なのか、教員たちの生活指導が行届いているためか、原因は分からないが、「描く」ことの経験値が全体的に低く感じた。また、感覚的に「絵を描く」と「落書きをする」とが行儀よく分別されている生徒たちが多いのも気になった点である。

（４）本研究によって、教科専門領域と教育現場とを結びつけることの難しさを実感したが、絵画表現・絵画技法の研究者として、また宮崎大学教育学部の教員として、魅力的なフィールドに出会えたと感じている。今後もこの研究を起点し、私の専門領域を学校教育現場に活かす教材の研究をおこなっていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文（作品論評）〕（計　２　件）

大泉佳広、作品タイトル「KAZE NO SEKAI」、『美術の窓』査読無、№399、2016、P136

大泉佳広、作品タイトル「空」、『美術の窓』査読無、№423、2018、P264

〔学会発表〕（計　２　件）
大泉佳広　「KAZE NO SEKAI」、「第 84 回独立展」（新国立美術館）、独立美術協会、2016
大泉佳広　「空」、「第 86 回独立展」（新国立美術館）、独立美術協会、2018

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

特になし

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：樺島　優子、前村　卓巨、伊東　珠樹、佐々木里加
ローマ字氏名：KABASHIMA Yuko、MAEMURA Takumi、ITOU Tamaki、SASAKI Rika

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。